九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

近世上方語における接続助詞ケレドモの発達

坂口，至
熊本大学文学部助教授

https://doi.org/10.15017/11915

出版情報：語文研究. 70, pp.23-34, 1990-12-25. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

近世上方語における接続助詞ケレドモの発達

坂口　至

一

近世上方語の文法的変遷の解明を一つの課題として、断続的に調査しているが、本稿では逆接の接続助詞ケレドモの発達過程について、これまで知り得たことを報告したい。

接続助詞ケレドモの発達過程についての研究は、各種の国語史の概説書などで簡単に触れられる以外は、目下のところ西田絢子氏「『けれども』考―その発生から確立まで―」（東京成徳短大紀要一一、昭五三）という論文を見るに過ぎないようである。[1] 西田氏は、ケレドモが成立した中世後期から、逆接確定条件の接続助詞として主流となった近世末期までの長い期間を、多数の資料を駆使して記述し、次のような結論を得ておられる。

「けれども」の語史は、左の四期に分けることができる。

Ⅰ　発生期　室町時代後期（推量の助動詞「まい」「う」に下接した例がみられる。「まいけれども」の形が「けれども」の起源ではないか。[2]）

Ⅱ　発達期㈠　江戸時代初期（「まい」「う」の他、「たい」「た」などの助動詞、また形容詞、動詞、動詞型活用の語に下接した例がみられる。）

Ⅲ　発達期㈡　江戸時代中期（すべての活用語に下接する可能性をそなえるようになり、用例数も増加する。）

Ⅳ　確立期　江戸時代後期（接続助詞としてのみならず、接続詞・終助詞としても用いられ、「けども」のような語形もあらわれて、いっそう現代語化する。）

この論文に教えられるところは極めて多いが、近世上方語の解明という筆者の立場からは、なお次のような点を問題としたいところである。

（1）この論文では、上方語の資料と江戸語の資料とが明確に区別されていない。上方語と江戸語のそれぞれの変遷に同一の言語現象でも場合によっては大きな違いがあることは、近世語研究者の常識である。従って、ケレドモの語史の時代区分を試みる際には、それぞれ別個に調査した結果を用いるべきである。

（2）ケレドモに上接する語が、まず助動詞に始まり、漸次動

詞・形容詞などに及ぶとされるが、動詞と形容詞の差異は有るのかどうか。

（3）近世語の、特に文法現象の記述に不可欠と思われる位相差の観点がこの論文にはみられない。

二

まず、調査資料に関しては、何らかの形で近世上方語を反映するもののうち、質・量ともにある程度以上兼ね備えたものとして、筆者は今のところ、能狂言資料・歌舞伎資料・浄瑠璃資料・洒落本資料・噺本資料の五つを考えている。

これらは、それぞれに性格の異なったものであり、同列に扱うことには当然危険が伴うが、今回はあまり資料の性格に深入りする余裕がないので、これらの資料から帰納できる大まかな傾向を記述するに止めたいと思う。[3]

方法的には、まずは西田氏と同じように、旧来の接続動詞ドまたはドモとの対比によってケレドモの発達状況を把握する、という行き方を採りたいと思う。言うまでもなく、ケレドモが、ドやドモの持っていた意味・用法を総て引き継いでいる訳ではなく、ケレドモ以外の表現をせざるを得ない場合や、未だにドモでしか表現できない場合もあるので、同じく文法事項といっても、例えば二段活用の一段化などのような単純な歴史的交替現象とは性格の異なるものであるが、これについても別の機会に考えることとしたいと思う。

以下、各種の資料から得られた数字を表にまとめ、それらを年代順に並べて傾向を見て行くことにする。なお、各表は本稿末尾に調査文献とともに一括して掲げる。本文との対照に不便であるが、表数の多さを考慮してのことである。諒解を乞いたい。

近世期を、ここでは便宜的に四期に分けている。各種の資料が比較的集中している元禄期（一六八八より）から享保期（一七三六まで）にかけてのほぼ五十年と、宝暦期を中心とした前後のほぼ五十年（一七三六～八九）を二つの柱として、前者の前の時期、後者の後の時期の四期である。[4]

まず、第一期の貞享（一六八四～八八）以前の実態を、表の見方を説明しながら見て行く。この時期には、能狂言本（表1）と噺本（表2）の資料がある。能狂言本のみは、一本だけでも言語量がかなりあり、流派の違いもあるので、文献ごとに数値を出した。[5] 表の見方であるが、西田氏に従い、上接語ごとに分類している（参考までに、本稿の各表の後に、西田氏の調査結果の表を引用している。随時参照されたい）。ゴチックでない数字は、該当する用例の延べ数で、ゴチックの数字は、新形ケレドモ・ケレドが旧来型ドモ・ドと合わせた用例数に占める比率を示す。空欄は用例ナシを示す。また、指定の助動詞ナリや意志推量の助動詞ウなどを別扱いにしたのは、これらが近世全期を通じて、一方の接続助詞しか下接させないためである。すなわち、ケレドモとドモの勢力分布を見るためには、どちらの接続助詞をも取る可能性のある語で比較することが必要と考えたわけである。

表によって、この時期、ケレドモは、中世後期と同じく、ほとんど助動詞マイとウにしか付かないことが分かる。噺本に、過去の助動詞タに付いた例が見られるが、これを含む作品は、『けらわらひ』という一六八〇年刊のもので、もはや第二期の直前と言える。

次に第二期に移る。この時期の代表的口語資料である近松の世話物浄瑠璃（表3）と、近松に対抗する紀海音の世話物浄瑠璃（表4）の調査結果を、歌舞伎の絵入狂言本（表5）や噺本（表6）のそれ比較して見れば、前者の特異性が浮かび上がって来るようである。すなわち、絵入狂言本や噺本の場合は、ケレドモの用例数はかなり違うけれども、タなどの助動詞に下接することが多いのに対して、浄瑠璃の場合にはそれらがなく、用例は少ないけれども動詞に下接する割合が高いという事実である。これの意味については、後に改めて考えることにする。

次の宝暦期（一七五一～六四）を中心とした第三期では、歌舞伎台帳資料（表7）、洒落本資料（表8）、噺本資料（表9）の三種の資料を調べたが、やはり洒落本に新しいケレドモが高い比率で現れており、他の様々なことばと同様、その口語性の高さを物語るようである。ここでも、助動詞に下接するケレドモの割合が依然として高いことが分かる。動詞と形容詞については有意の差かどうか判然としない。

最後に、寛政期（一七八九～一八〇一）以降の第四期では、洒落本（表10）と噺本（表11）を調査した。この時期の洒落本に至って、ようやくケレドモがドモを押さえて優位に立ち、噺本でも拮抗状態に近くなっている。

なお、この時期には、これらの資料の外に、本居宣長の『古今集遠鏡』（一七九三成）と、心学道話集（中沢道二『道二翁道話集』および柴田鳩翁『鳩翁道話集』というよく知られた口語文献があり、これらにケレドモが比較的多く現れているので、参考までに表にしている。（表12、表13、表14）。『古今集遠鏡』は、宣長自身の序文によれば、京都あたりの話し言葉を用いて、時に女性の言葉も交えて当代語訳したとのことであるが、ケレドモに関する限り、当時の上方語を比較的よく反映しているように見える。心学道話集については、概説書等を見ると、口語資料としては特殊とも述べられているが、中沢道二のものにおけるケレドモに限れば、なかなか口語性が高いと言えそうである。むしろ、よく知られた『鳩翁道話集』の方が、年代的には下るにもかかわらず、問題のある資料ということになる。

この時期の、他の特徴としては、動詞、形容詞に下接するケレドモの比率が、助動詞の場合のそれに次第に近付いて来ていること、さらに、動詞と形容詞の間に有意差がありそうだということである。この有意差、つまり形容詞にケレドモが下接する場合の方がやや遅れ気味であるということが認められるとすれば、それにはこういう理由が考えられるであろう。すなわち、元の形容詞已然形＋ドモの形態そのものに、例えば良ケレドモとか楽シケレドモのように、見せ掛けのケレドモの形が含まれているために、接続助詞のケレドモとは無関係にもかかわらず、時としてそのように意識されることがあり、助動詞や動詞の場合で発達して来たケレドモの中に紛れて、新しい形への移行がやや緩慢になったのではないかということである。

次に、資料ごとの変遷を眺めてみると、歌舞伎資料、洒落本資料、噺本資料それぞれに、後の時代のものが、確実に新しいケレドモの勢力を伸ばした姿を反映しており、その程度は様々であるが、例えば歌舞伎資料での詞章の固定化、あるいは噺本資料での前代の本の焼き直しや盗み取りによる文章の古さといった、しばしば指摘され

る資料的限界が、この接続助詞ケレドモに関しては当て嵌まらないようである。

以上によって、各期の概観を終えるが、これらを西田氏の調査結果と比較してみると（末尾の参考表を参照のこと）、大体において氏のものと一致しているようである。ただ、最後の確立期、これは筆者の第四期にほぼ重なるが、この時期のケレドモの勢力は、筆者の調査よりかなり強いという結果になっている。従ってこれは、江戸語の資料において一層ケレドモの比率が高いということを示しているようである。また、やはり確立期において、動詞と形容詞のケレドモの比率を比較してみると、形容詞の方が高くなっているが、筆者のでは先に述べたようにむしろ逆になっている。この辺は、先程述べた理屈も含めて検討し直す必要があるかも知れない。

ところで、西田氏は上接語によるケレドモの発達の遅速に関して、品詞による違いだけでなく、それらの語性も含めた傾向を、次のようにまとめておられる。

「けれども」の発達課程における傾向は、上位語となる語の活用の面では〈語形変化のない、もしくは安定していない語から語形変化のある語へ〉、その語の歴史の面では〈新しい語から古くからの語へ〉、その後の表現性の上からは〈より辞的な語からより詞的な語へ〉ということができるのではないかと考える。

この指摘にはほとんど賛成である。ただ一つ付け加えることができそうなのは、丁寧の助動詞マスに注目したいのであるが、再び（表6）、（表7）、（表9）を眺めてみると、マスが他の助動詞よりケレドモの付く比率がかなり低いという事実が目を引く。これは、マスとケレドモが共起しにくい理由があったからと考えられる。それは、ケレドモが丁寧な表現あるいは改まった表現に使いにくかったことを示すのではないか。傍証として、表には出していないけれど、動詞の中でも丁寧語として用いられるゴザルは、やはりケレドモと共起しにくいようであるし、動詞の二段活用が残存している場合はドモに付き易く、逆に一段化したものはほとんどケレドモについているようである。これらはいずれも、ことばの新旧とも無関係とは言えないが、くだけた場面での表現なのか、改まった場面での表現なのかという捕らえ方が、一層真実に近いと考えられる。

次に、位相差に関する調査結果を述べたい。

ここではまず、ケレドモがかなり発達しており、武士、町人、男性、女性が満遍なく登場する歌舞伎台帳に注目する。（表15）がその実態である。一目で位相差が明確に現れていることが分かる。武士は、新しいケレドモの使用頻度が極端に低く、そこには具体的には出していないが、ケレドモの11例はすべて助動詞に下接したものである。そして町人女性が新しいケレドモの使用率が最も高く、次いで町人男性、そして武士という順序は、他の文法的変遷、例えば二段活用の一段化と全く同じ傾向を示していることになる。

また、（表16）と（表17）は、洒落本で位相差を見たものである。ここでは、女性は遊女を主とする遊郭関係者、男性は町人が中心となるが、やはりはっきりとした傾向が出ている。近世の末期になると、徐々に男女差が縮まって来る様子も窺うことが出来るようである。

なお、噺本では、武士と女性の発話頻度がかなり低いせいもあり、はっきりとした傾向を見いだすことはできないようである。

三

以下は、付け足しとして、いくつかの付随した問題に触れておきたいと思う。

イ、近松・海音世話物浄瑠璃のケレドモ

まず、概観の初めの方で述べた、近松と紀海音の世話物浄瑠璃のケレドモの現れ方が、絵入狂言本や噺本と違っている点について考えてみる。次に、その全用例を挙げる。

（近松）

※人のかねをことづかりしばしのやどをかすけれ共。（『大経師昔暦』）

※けふのはたらき半日払ひにせふけれど。（『薩摩歌』）

（海音）

※土百性はするけれど子をぬす人にはうみ付けぬ。（『袂の白紋』）

※先順礼の法をもってぼうふることはふるけれど（『三井寺開帳』）

※いゝたい事も有けれど。いはぬしあんと計にて（『同』）

※いやはやけふのさめたこと十万にくれてゐるけれど。（『傾城三度笠』）

※そちにははらがたとけれど。了簡しやと有けれは。（『同』）

この問題については、かつて『文献探究』18号で紀海音の用語意識を考察した際に触れたことがある。すなわち、紀海音の浄瑠璃の詞章は韻律性が非常に高く、その韻律性を満足させるために、種々の言語操作が行われているらしいこと、ケレドモの用い方もその一つではないかということである。用例で説明すると、動詞に下接する初めの4例は、ケレド以外の逆接の接続助詞、つまりド、ドモ、もしくはガを用いては、七五の韻律を満たさず、後半が四音以下の字足らずになってしまうのである。字余りにたいして、字足らずが避けられるのは韻文の伝統で、海音の行き方も例外ではない。次の、助動詞ウが短呼されたものに下接した例については、ド、ドモはもともと付かないけれども、ガを用いようとしてもやはり字足らずとなる。従って、海音は詞章の韻律性を壊さないようにするために、当時のケレドモはタなどの助動詞に下接し易いという口語の状態をそのまま持ち込むのを避けたのだと解釈したいのである。この海音の行き方に対して、近松の韻律に対する姿勢は、ずっと穏やかではあるが、ここに挙げた例を見る限り、海音と全く同じ方針で臨んでいると考えてよいと思う。ともあれ、この時期の浄瑠璃詞章に関しては、韻律を重視した言語分析がもっと必要なのではないかと思われる。

ロ、疑問例

※ちっとも気づかひするな。我々悪人と一味と思ふけれども、全くさうではない。（歌舞伎脚本『好色伝受』、一六九三、日本名著全集による）

新しい言語現象が発生した場合、その最初期の用例が、いつ、どういう文献に現れるかは、国語史を記述する際に重要視されることの一つであるが、ここに挙げた歌舞伎『好色伝受』の例は、普通の動詞に下接したケレドモの最も早いものとして、湯沢幸吉郎氏の『徳川時代言語の研究』や明治書院の『日本文法大辞典』に取り上げられているものである。ところがこれはどうも誤認ではないかと

思われる。まず「思うケレドモ」では意味がよく通らない。ここは、相手が、自分達は悪人の一味だと心配しているのではないかと思った話者のことばで、傍線の部分は、「オモオウケレドモ」と読むべきである。つまりケレドモは動詞に下接しているのではなく、推量の助動詞ウについているのである。助動詞のウが「ふ」と表記され、動詞の活用語尾が送られないのは、この時期普通のことである。『好色伝受』の原本は見ていないが、この翻字本のこの部分は恐らく原本のままではないかと想像する。ところで、この部分を誤認されていると思ったのは、別に理由がある。それが、今回のケレドモの全体的な調査結果から導き出せるものであって、この部分の発話者は武士であるが、先に述べたように、武士が用いるケレドモは、一七〇〇年代の半ば頃でもまだ助動詞に下接したものしか見出していないからである。もちろん、孤例の可能性はいつの場合でも否定できないが、この場合はやはり無理と考える。

ハ、ケレドモとケレド

これまで、ケレドモとケレドを一括して扱ってきたが、末尾のモの有無について、（表18）に簡単にまとめてみた。これによれば、既に十八世紀の前半から、末尾のモを落とす形が一般になったようである。面白いのは『古今集遠鏡』で、ケレドモもしくはケレドの発達状況では、当時の口語に近いと述べたが、末尾のモの有無では必ずしもそうではない。尤も、これは個人差、あるいは文体差の問題として処理すべきものかも知れない。

ニ、ケドの出現

最後に、この接続助詞の最も新しい語形ケドの出現について触れておきたい。『徳川時代言語の研究』や『日本国語大辞典』では、ケドの最も早い例として、一七三二年の『忠臣金短冊』という浄瑠璃本（筆者未見）を挙げているが、今回の調査では、

※そりやわしらもしらぬけど、（噺本『新製欣々雅話』、一七九九、遊女）

※おかたふおますけど（洒落本『北川硯殻』、一八二七、芸子）

のように、かなり後の例しか見出せなかった。それも頻度はかなり低く、遊里関係の女性の発話に限られている。

四

以上、近世上方語における接続助詞ケレドモの発達状況を簡単に見て来た。各種の資料ともに、内部差を捨象したものしか出すことができなかったが、実際には、例えば同じ洒落本資料でも、本によってケレドモがほとんど出ないもの、逆にケレドモばかりという本もある。その本の資料的価値の判定に、このケレドモも役に立つということを意味する筈であるから、その方向の検討も課題とすべきであろう。また、今回、時間の都合で調べ得なかった資料、例えば近松や海音以降の浄瑠璃資料、あるいは上方滑稽本資料などについても引き続き調査する必要がある。

さらに、視野を広めて、ケレドモが種々の逆接確定条件表現を表す助詞の中でどのような位置を占めているのかについても、改めて考える必要がある。今日、接続助詞ケレドモと接続動詞ガは、文体差による使い分けという点でも、役割を分担しているが、その発祥が近世期にあるのかどうか、など興味は尽きない。

注

1 専らケレドモの起源について論じたものに、中野容子氏「接続助詞〈けれども〉の成立」（「戍蹊国文」14、昭和55）がある。

2 発生期である中世後期のケレドモについては、本稿の趣旨に従って一切触れないことにしたい。

3 近世上方語の文法的変遷については、諸家の研究が積み重ねられて来ているが、なお不充分な点が多い。特に、個々の文法的現象について近世全期を通史的に眺めた研究が非常に少ないことが問題である。もちろん、これには、資料の偏りによる制約、研究者の興味のありかなど、止むを得ぬ事情も存する。また、そもそも通史とは、一つ一つの資料を詳細に調べ、相互に比較検討した後に初めて描けるものであって、今はまだその段階ではないと考える研究者も多いであろう。それは尤もではあるが、全体を常に視野に入れておくことで、個の特異性を浮かび上がらせることが可能になり、あるいは個に対する新たな視点が得られることもあり得る。本稿もその方向を目指すものである。

4 西田氏は、近世期をほぼ世紀ごとに三期に分けておられる。

5 数字はいずれも会話文中の用例。以下同じ。なお、虎明本の数字は、小林賢次氏「大蔵流狂言台本における逆接条件表現」（「言語と文芸」99、昭61）を引用させていただいた。

〈付　表〉

（表1）能狂言本資料

	ド・ドモ			ケレド・ケレドモ		
	虎明本	古本	狂言記	虎明本	古本	狂言記
動　詞	241	124	17			
形容詞	43	36	1			
形容動詞		6				
過去タ	90	41	12			
打消ヌ	23	25	3			
丁寧マス	4	4	4			
希求タイ	11	4				
その他	5	4				
計	402	244	37			
指定ナリ	86	70	1			
指定ジャ						
推量ウズ	17	21	4			
推量ウ					1	1
打消マイ				1	4	1

大蔵流虎明本（一六四二）＝臨川書店、和泉流和泉家古本（天和頃）＝日本庶民文化史料集成、狂言記正編（一六六〇）＝勉誠社

（表2）噺本資料（第一期）

	ド・ドモ	ケレド・ケレドモ	比率%
動　詞	44		0
形容詞	8		0
形容動詞	1		0
過去タ	5	2	10（省略）
打消ヌ	6		
丁寧マス	1		
希求タイ	1		
その他	8		
計	74	2	3
指定ナリ	15		
指定ジャ			
推量ウ			
打消マイ			

昨日は今日の物語（寛永以前）わらいくさ（一六五六）私可多咄（一六七一）宇喜蔵主古今咄揃（一六七八）当世軽口咄揃（一六七九）軽口大わらひ（一六八〇）当世手打笑（一六八一）当世口まね笑（一六八二）＝噺本大系、けらわらひ（一六八〇）＝古典文庫

（表3）近松世話物浄瑠璃本資料

	ド・ドモ	ケレド・ケレドモ	比率%
動　詞	102	2	2
形容詞	55		0
形容動詞	2		0
過去タ	70		0（省略）
打消ヌ	78		
丁寧マス			
希求タイ	3		
その他	19		
計	329	2	1
指定ナリ	88		
指定ジャ			
推量ウ		1	
打消マイ			

曽根崎心中（一七〇三）薩摩歌（一七〇四）心中二枚絵草紙（一七〇六）卯月の紅葉（一七〇六）卯月の潤色（一七〇七）堀川波鼓（一七〇七）五十年忌歌念仏（一七〇七）心中重井筒（一七〇七）心中万年草（一七〇八）丹波与作待夜の小室節（一七〇八）淀鯉出世滝徳（一七〇八）心中刃は氷の朔日（一七〇九）冥途の飛脚（一七一一）今宮の心中（一七一一）夕霧阿波鳴門（一七一二）長町女腹切（一七一二）大経師昔暦（一七一五）生玉心中（一七一五）鑓の権三重帷子（一七一七）山崎与次兵衛寿の門松（一七一八）博多小女郎波枕（一七一八）心中天の網島（一七二〇）女殺油地獄（一七二一）心中宵庚申（一七二二）＝岩波近松全集、岩波文庫、角川文庫

（表4）紀海音世話物浄瑠璃本資料

	ド・ドモ	ケレド・ケレドモ	比率%
動　詞	64	1	1
形容詞	28	1	3
形容動詞			
過去タ	76	3	4（省略）
打消ヌ	34		
丁寧マス	16		
希求タイ	6	1	
その他	8	2	
計	289	8	3
指定ナリ	95		
指定ジャ			
推量ウ		5	
打消マイ		1	

椀久末松山（一七一〇）なんば橋心中（一七一〇）袂の白絞（一七一〇）今宮心中丸腰連理松（一七一一）三井寺開帳（一七一二）傾城三度笠（一七一三）八百やお七（一七一五）二十五年忌（一七一九）心中二ツ腹帯（一七二二）＝紀海音全集

（表5）歌舞伎絵入狂言本資料

比率%		ケレド・ケレドモ	ド・ドモ	
1		1	121	動詞
3		1	28	形容詞
				形容動詞
4	（省略）	3	76	過去タ
			34	打消ヌ
			16	丁寧マス
		1	6	希求タイ
		2	8	その他
3		8	289	計
			95	指定ナリ
				指定ジャ
		5		推量ウ
		1		打消マイ

大隈川源左衛門（一六八八）大織冠（一六八八）金岡争（一六九〇）娘親の敵討（一六九一）四国辺路（一六九一）心中八嶋（一六九三）日本阿闍世太子（一六九四）連理松（一六九五）入鹿大臣（一六九七）代々の御神楽（一六九八）富貴大王（一六九九）傾城二見の浦（一六九九、二替）傾城花筏（一六九九）小野小町（一六九九）福寿海（一六九九）傾城ぐせいの舟（一七〇〇、二替）鎌倉正月買（一七〇〇）本朝廿四孝（一七〇〇）傾城奈良土産（一七〇一、二替）日本記索戔嗚尊（一七〇一）新小町栄花車（一七〇一）傾城在原寺（一七〇二、二替）女郎来迎柱（一七〇二）丹波国血汐乃水風呂（一七〇二）四ツ橋娘殺し（一七〇二）壬生秋の念仏（一七〇二）和歌三神影向松（一七〇五）傾城元女塚（一七〇六）天満屋心中（一七〇六）難波重井筒（一七〇八）梅丸大嶋台（一七〇八）厳嶋姫滝（一七〇九）傾城竹生嶋（一七一〇、二替）傾城柏の大黒天（一七一三、二替）傾城十三鐘（一七一五）傾城錦産衣（一七一六、二替）傾城夫立石（一七一六、二替）成相観音縁起（一七一九）傾城八万日（一七二〇、二替）＝翻刻絵入狂言本集上・下

（表6）噺本資料（第二期）

比率%		ケレド・ケレドモ	ド・ドモ	
3		2	58	動詞
7		1	13	形容詞
0			1	形容動詞
4	40	6	9	過去タ
	30	3	7	打消ヌ
	10	1	9	丁寧マス
		1		希求タイ
		1	6	その他
3		15	103	計
			11	指定ナリ
				指定ジャ
		1		推量ウ
		1		打消マイ

軽口露がはなし（一六九一）当世軽口遊小僧（一六九四）露新軽口はなし（一六九八）露五郎兵衛新はなし（一七〇一）百登瓢覃（一七〇一）軽口御前男（一七〇三）軽口ひやう金房（一七〇四頃）軽口あられ酒（一七〇五）露休置土産（一七〇七）軽口星鉄炮（一七一四）軽口出宝台（一七一九）軽口機嫌嚢（一七二八）当世座狂はなし（一七三〇）咲顔福の門（一七三二）軽口独機嫌（一七三三）軽口蓮茱山（一七三三）＝噺本大系

（表7）歌舞伎台帳資料

比率%			ケレド・ケレドモ	ド・ドモ	
15			22	120	動詞
17			11	54	形容詞
0				1	形容動詞
32	36		48	86	過去タ
	32		25	53	打消ヌ
	11		7	56	丁寧マス
	54		7	6	希求タイ
			15	13	その他
26			135	389	計
				73	指定ナリ
			24		指定ジャ
			25		推量ウ
			6		打消マイ

傾城嵐山（一七三九）卅三年忌袂白絞（一七四〇）傾城室町桜（一七四三）菊水由来染（一七四三）傾城千引鐘（一七四四）昔形吉岡染（一七四五）幼稚子敵討（一七五三）傾城里大集（一七五七）三拾石艘始（一七五八）傾城花城山（一七六四）＝歌舞伎台帳集成

（表8）洒落本資料（第三期）

比率%			ケレド・ケレドモ	ド・ドモ	
13			2	13	動　詞
17			1	5	形容詞
					形容動詞
57			10	2	過去タ
			1	2	打消ヌ
	（省略）		1	2	丁寧マス
				1	希求タイ
			1	3	その他
37			16	28	計
				3	指定ナリ
			7		指定ジャ
			3		推量ウ
					打消マイ

穿当珍話（一七五六）月花余情（一七五八以前）新月花余情（一七五七）聖遊廓（一七五七）陽台遺編（一七五七以前）妣閣秘言（一七五七以前）原柳巷花語（宝暦年間一七五一～一七六四）郭中奇譚（一七七一）風流裸人形（一七七八）虚辞先生穴賢（一七八〇）短華蘂葉（一七八六）＝洒落本大成

（表9）噺本資料（第三期）

比率%			ケレド・ケレドモ	ド・ドモ	
15			5	28	動　詞
0				21	形容詞
0				1	形容動詞
29	50		6	6	過去タ
	33		3	6	打消ヌ
	21		3	11	丁寧マス
	25		1	3	希求タイ
			2	11	その他
19			20	87	計
				26	指定ナリ
			2		指定ジャ
					推量ウ
					打消マイ

軽口初売買（一七三九）軽口福おかし（一七四〇）軽口新歳袋（一七四一）軽口耳過宝（一七四二）軽口若夷（一七四二）軽口へそ順礼（一七四六）軽口瓢金苗（一七四七）軽口笑布袋（一七四七）軽口浮瓢単（一七五一）軽口腹太鼓（一七五二）軽口豊年遊（一七五四）口合恵宝袋（一七五五）軽口東方朔（一七六二）軽口はるの山（一七六八）絵本軽口福笑（一七六八）軽口片頬笑（一七七〇）絵本珍宝艸（一七七二頃）新軽口恵方宝（一七七二頃）軽口大黒柱（一七七三）軽口五色帋（一七七四）年忘噺角力（一七七六）立春噺大集（一七七六）夕涼新話集（一七七六）時勢話大全（一七七七）時勢話綱目（一七七七）絵本初春咄の種（一七八一頃）春帖咄（一七八二）歳日話（一七八三）＝噺本大系

（表10）洒落本資料（第四期）

比率%			ケレド・ケレドモ	ド・ドモ	
56			18	14	動　詞
46			13	15	形容詞
					形容動詞
75	83		34	7	過去タ
	61		11	7	打消ヌ
	82		9	2	丁寧マス
	50		2	2	希求タイ
			8	3	その他
66			95	50	計
				10	指定ナリ
			33		指定ジャ
			10		推量ウ
			4		打消マイ

睟のすじ書（一七九四）北華通情（一七九四）うかれ草紙（一七九七）阿蘭陀鏡（一七九八）十界和尚話（一七九八）身体山吹色（一七九九）南遊記（一八〇〇）当世嘘の川（一八〇四）竊潜妻（一八〇七）当世廓中掃除（一八〇七）箱まくら（一八一二）花街風流解（一八二四）深色疾睡夢（一八二六）北川蜆殻（一八二七）＝洒落本大成

（表11）噺本資料（第四期）

比率%			ケレド・ケレドモ	ド・ドモ	
40			22	33	動　詞
41			12	17	形容詞
					形容動詞
52	52		16	15	過去タ
	40		8	12	打消ヌ
	50		12	12	丁寧マス
	67		2	1	希求タイ
			6		その他
46			78	90	計
				28	指定ナリ
			13		指定ジャ
			1		推量ウ
			3		打消マイ

軽口四方の春（一七九四）軽口筆彦咄（一七九五）鳩潭雑話（一七九五）雅興春の行衛（一七九六）臍が茶（一七九七）庚申講（一七九七）新話違なし（一七九七）新製欣々雑話（一七九九）曲雑話（一八〇〇）笑の友（一八〇一）新撰勧進話（一八〇二）麻疹噺（一八〇三）玉尽一九噺（一八〇八）臍の宿かえ（一八一二）会席噺袋（一八一二）花競二巻噺（一八一四）春興噺万歳（一八二三）小倉百首類題話（一八二三）落噺千里籔（一八二六）噺栗毛（一八三〇）噺の魁二編（一八四四）落噺千里籔（一八四六）＝噺本大系、大寄噺の尻馬（半紙本一～三編、天保以降）大寄噺の尻馬（小本一～六編、一八五四頃）＝伝承文学資料集成

（表12）『古今集遠鏡』

古今集遠鏡（一七九三成）＝本居宣長全集

比率%	ケレド・ケレドモ	ド・ドモ		
53	32	28	動詞	
27	3	8	形容詞	
50	1	1	形容動詞	
68（省略）	9		過去タ	
	4	4	打消ヌ	
		3	丁寧マス	
			希求タイ	
	2		その他	
54	51	44	計	
		16	指定ナリ	
	11		指定ジャ	
	5		推量ウ	
	2		打消マイ	

（表13）『道二翁道話集』

道二翁道話（一七九五～一八二四）＝初篇～岩波思想大系、二～六篇～岩波文庫、鳩翁道話（正一八三五、続一八三六、続々一八三九）＝正～岩波思想大系、続、続々～岩波文庫

比率%	ケレド・ケレドモ	ド・ドモ		
60	55	37	動詞	
32	7	15	形容詞	
50	1	1	形容動詞	
48（省略）	3	2	過去タ	
	6	2	打消ヌ	
		1	丁寧マス	
			希求タイ	
	1	6	その他	
53	73	64	計	
		31	指定ナリ	
	15		指定ジャ	
	2		推量ウ	
			打消マイ	

（表14）『鳩翁道話集』

比率%	ケレド・ケレドモ	ド・ドモ		
8	4	46	動詞	
8	2	22	形容詞	
0		3	形容動詞	
5（省略）		11	過去タ	
	2	22	打消ヌ	
	1	34	丁寧マス	
		2	希求タイ	
	1	7	その他	
6	10	147	計	
		29	指定ナリ	
	2		指定ジャ	
	2		推量ウ	
	3		打消マイ	

（表15）歌舞伎台帳資料

	武士	町人 男	町人 女 左以外	町人 女 遊女
ド・ドモ	233	123	83	21
ケレド・ケレドモ	11	72	83	24
比率%	5	37	50	53
		51		
		44		

（表16）洒落本資料（第三期）

	男	女
ド・ドモ	23	8
ケレド・ケレドモ	10	16
比率%	30	67

（表17）洒落本資料（第四期）

	男	女
ド・ドモ	32	28
ケレド・ケレドモ	37	105
比率%	54	79

（表18）

第四期					第三期			第二期	
鳩翁道話	道二翁道話	古今集遠鏡	噺本	洒落本	噺本	洒落本	歌舞伎台帳	噺本	
8	4	50	9	10	5	3	34	7	ケレドモ
9	86	19	86	132	22	23	156	9	ケレド
53	96	28	91	93	81	88	82	56	比率%

〈引用表〉

「けれども」「ども」の用例数　　注：（　）内が「ども」の用例数

上位語（　）内は「ども」の上位語の已然形 ＼ 期	まい（まじけれ）	う（うずれ）	ぺい（べけれ）	たい（たけれ）	た（たれ）	だ（なれ）	ぬ（ざれ）	その他の助動詞	形容詞（タ活）	形容詞（シタ活）	動詞・動詞型活用の語	計
発生期	12 (4)	8 (73)	／ (12)	／ (29)	／ (631)	／ (490)	／ (108)	／ (24)	／ (227)	／ (23)	／ (701)	20 (2322)
発達期㈠	2 (1)	25 (12)	1 (1)	4 (4)	8 (104)	／ (78)	／ (39)	1 (18)	1 (29)	1 (5)	3 (301)	46 (601)
発達期㈡	7 ／	25 ／	2 (2)	3 (7)	28 (163)	17 (253)	9 (137)	／ (18)	17 (104)	2 (16)	42 (326)	152 (1026)
確立期	13 ／	34 ／	1 ／	14 (4)	69 (27)	108 (58)	22 (49)	58 ／	108 (41)	11 (1)	125 (86)	563 (266)